

住宅の普遍性を求めて

4人の建築家のアプローチ

堀部安嗣

軽井沢の家II

横内敏人

ヒメシヤラの森の家

三澤文子

楓の家

伊藤寛

Piccolo Teatro

Toshihito Yokouchi

Yasushi Horibe

Fumiko Misawa

Hiroshi Ito

住宅の普遍性を求めて 4人の建築家のアプローチ 目次

座談会: 横内敏人×堀部安嗣×三澤文子×伊藤寛
世代も機能も超えて愛され続ける住宅 4

横内敏人 横内敏人建築設計事務所 ヒメシヤラの森の家 2010 17
「ヒメシヤラの森の家」を見て 38

堀部安嗣 堀部安嗣建築設計事務所 軽井沢の家Ⅱ 2010 39
「軽井沢の家Ⅱ」を見て 60

三澤文子 Ms建築設計事務所/MSD 楓の家 2011 63
「楓の家」を見て 84

伊藤寛 伊藤寛アトリエ **Piccolo Teatro** ー小さな劇場ー 2009 85
「**Piccolo Teatro** ー小さな劇場ー」を見て 105

収録作品データ 108

世代も機能も超えて 愛され続ける住宅

社会的財産としての住宅

堀部——僕ら4人は同じ京都造形芸術大学の大学院で設計を教えているのだけれど、設計の合評会をやってみると、この4人の観点が違うのがよくわかります。その観点がそれぞれの作品に繋がっていると思うんです。

わかりやすく言えば、横内スタジオは非常に実践的です。建築を自然にひもといっていくようにプランニングを収斂させていくやり方。建築が完成するまでのひとつの流れをつくってあげるというか。それは横内さんの作品にも表れていると思う。

三澤スタジオは「南面を重視する」とか「自然の力を生かす」とか「構造的アプローチ」とか。また、1+1=2のようなロジカルに導かれるエンジニアリング的な観点を学生に対しても重視している。伊藤スタジオの場合はまったくそれらとは違う。よくご自身でも「舞台装置」という言葉をお使いですが、建築を活気のある華やかな場にする、1+1=2じゃないロジカルな発想ではないところから建築を見ていると思った。

横内——堀部スタジオは建築のオーダーというか、空間の構成の秩序や構造の秩序を重視していると思う。よく「住宅を設計しているのか、建築を設計しているのか」という話があります。施主の要求や周辺状況など細かくそれらに対応しようとすればするほど混乱してしまう。一方で、そういったものとは関係なく、自立した建築のオーダーがある。そのせめぎ合いだと思うんです。最終的にはうまくそれらが調和し、その両面性を持った作品が最高の作品だと思うのですが、堀部スタジオはその建築側からアプローチして、その中に生活をどう盛り込んでいくかという指導の仕方だと思うんです。

堀部——たとえば、家を持ちたいとか事務所を借りたいといった場合に、普通に構造や配置がしっかりしていればいいと思えるじゃないですか。それと同じ感覚で、自分が設計する場合にも同じことを考えればいいんです。メインのご飯がしっかりしていればあまりおかずはいらない、というか。あるいは、特別で特殊なものよりは、むしろ、嫌なところがないというものに共鳴します。秩序という言葉は大げさかもしれませんが、秩序ある構造、秩序ある建築のあり様というものがあれば、人はそこで十分豊かに暮らしていける。

三澤さんの場合、非常にロジカルに建築を構成しますよね。先ほどもお話したように、1+1=2のような。もちろんそれだけではありませんが、そのアプローチが基軸になっているような気がします。僕なんかそのあたりはぼんやりしている。

三澤——気質的にそうだと思います。もともと学生の頃は物理を専攻していたということもあるか



もしれません。

堀部——エンジニアリング的な発想がとても強いですよ。

三澤——若い頃からその気質は変わらないかもしれません。親が事業をしていたので考え方が合理的だったのです。私のつくる空間も幼い頃の前風景が蓄積されているのかもしれない。私は静岡県の富士山の麓で生まれ、自然のサイクルを身近に感じていました。また周りにはサラリーマンが誰もいなくて、自宅で商売をしたり農業をやっている人が多かった。

堀部——良い意味で住宅を「装置」のように捉えているところがありますよね？

三澤——住宅を設計するといった場合、その家族のために設計しているように見えて、200年建物がもつとしたらその家族だけのものではないわけです。その家族の次の世代、あるいはまったく別の人が住むかもしれない。住宅にはそれを受け入れるだけのキャパが必要です。だからしっかりとした架構で、その中にある程度自由な空間をつくり出すことを基本としています。

伊藤——そのときに大事なことははっきりしていますよね。構造システムや日射条件など。

三澤——その通りです。いま私は改修設計に力を入れているのですが、古い建物を調査してつくづく感じるのは、骨格のしっかりしているものは直して使えるのだけれど、高度経済成長期に建てられたものは助けようがない。でもなんとか生かしてあげようとしています。だから、自分が新築を設計するときは、後世にこれを生かしてあげようと思ってもらえるような建築をつくりたいと考えています。もし自分が設計した家が売りに出されたとしても全然構いません。それだけ不動産価値があると認められたのですから。

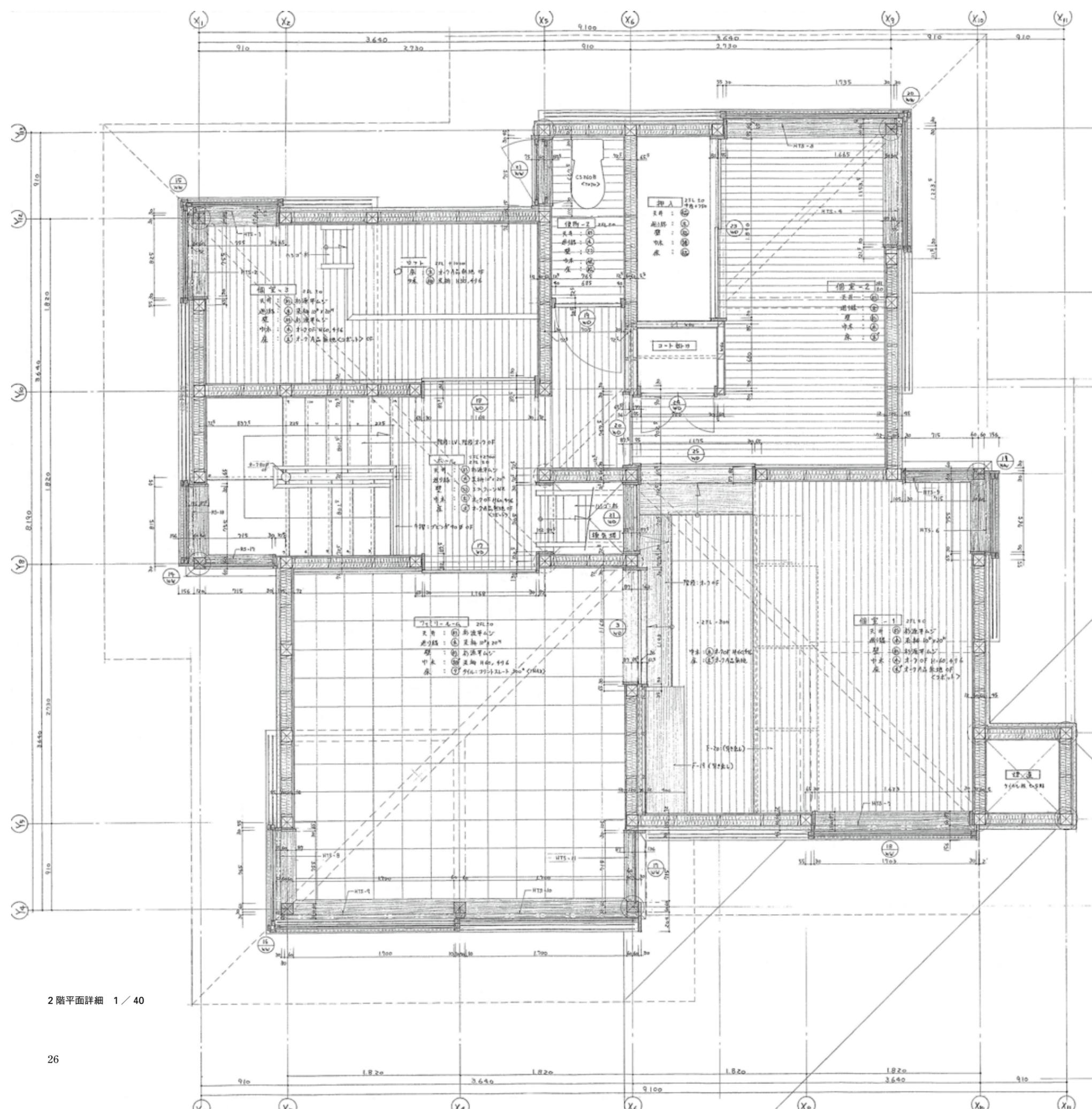
伊藤——家は個人のもですが、ある普遍性を持っているということの証ですよ。

三澤——ええ。社会的財産だと思っています。

横内——転売されてもいいけれど、壊されたくはないよね。いろいろな世代の人に愛され続けてほしい。施主に満足してもらいたいというのは当たり前として、それだけじゃなくて、住む人が変わっても愛され続けてもらえる建築とは何かをいつも考えています。

90年代の作家たち

堀部——「森のアトリエ」(1999)や「若王子のゲストハウス」(2002)をはじめ、横内さんの建築を見ていて思うのは、楽観主義で大らかさが根底にあることです。自然や外部環境に対しても楽観的に捉えているところがあって、さまざまな人に「これでいいよね」と思わせるような建築をつくらう



2階平面詳細 1 / 40



2階ファミリールーム開口部。2階からは1階と異なった景色が楽しめる



2階個室-1。2階の個室群は天井高を低く抑え、囲まれた雰囲気を出している

単位空間のずれを利用する

3.64m角の単位空間を矢車形にずらすことにより、0.91m角の余剰のスペースがいくつか生まれる。平屋部分ではそこを煙道として利用し、暖炉・ストーブ・調理用コンロの排気をまとめている。2階建ての部分ではそこに換気塔を設け、こもりがちな湿気を抜き、室内に空気の流れをつくるための吹抜け空間とした。また外部に面した2カ所については外周部の部屋を繋ぐ階段通路としており、これにより建物内にさまざまな動線の循環を生み出している。

単位空間をずらすことにより建物は数多くの出隅と入隅を持つことになる。それは外観に表情豊かな陰影を与え、内部においては空間を適度に分節し、それぞれの部屋

自体が出窓になったような開放的な雰囲気をもたらす。その効果を強調する意味でも開口部はコーナーに設けることを原則とした。特に1階の食堂・台所部分は総ガラス張りのワンルームとすることで270度パノラマで自然の景色を楽しめるようにし、同時にずれて分節することにより、それぞれの場所が緩やかに性格づけられることになった。

一辺が3.64mの空間の単位を選択したのは、その寸法がどのような機能に対しても融通のきくものであり、なおかつ日本人には身近なスケール感を持ち、さらに構造的にもコスト的にも無理のないものだったからである。それぞれの単位空間は、機能や性格に応じて開口部の取り方や内部仕上げや天井高さなどをあえて変化させ、それらを循環する動線で繋ぐことで空間体験を持たせるようにしている。



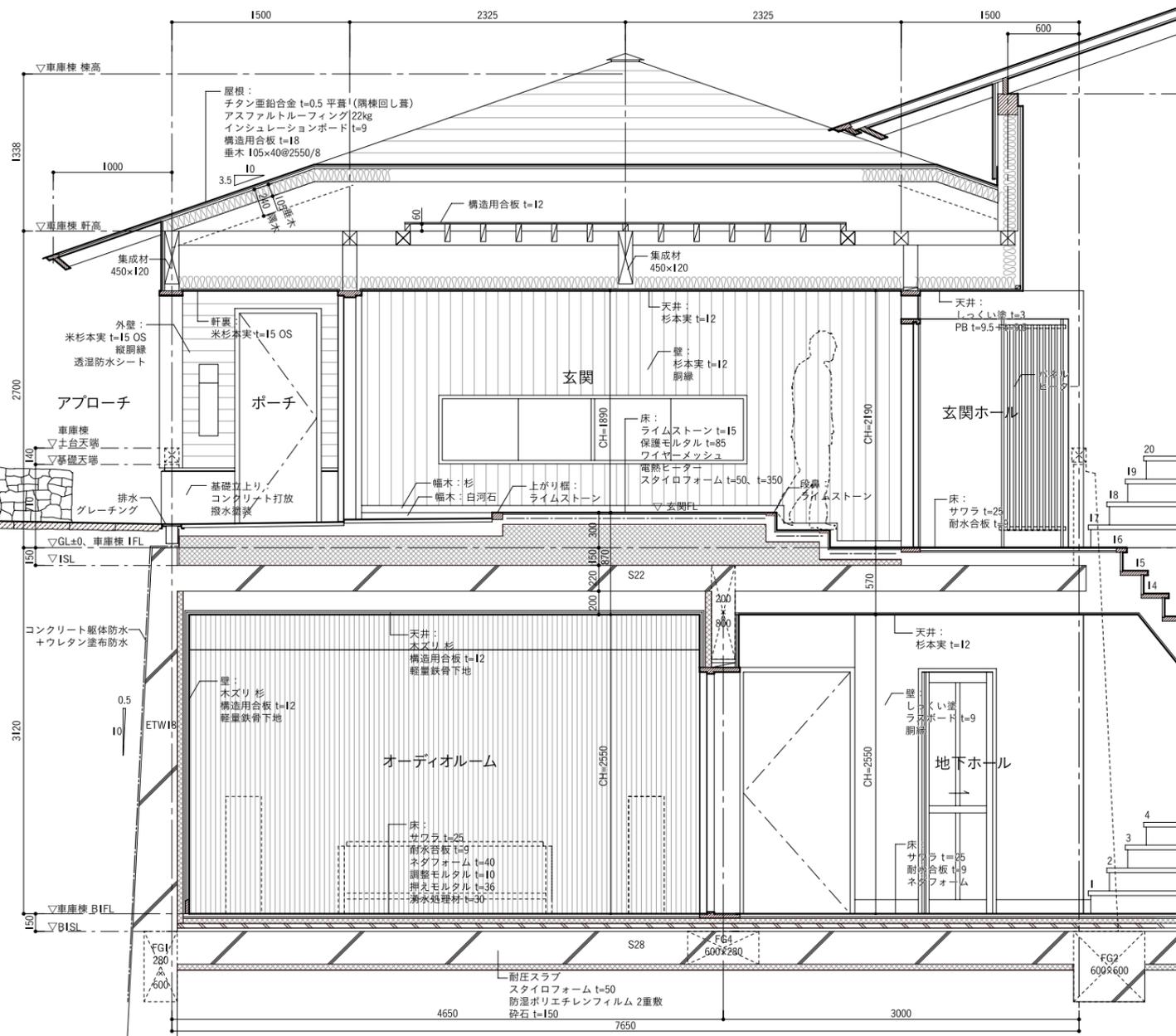
南側外観。屋根に沿って3つの棟が連続しているのが見える。外壁は米杉



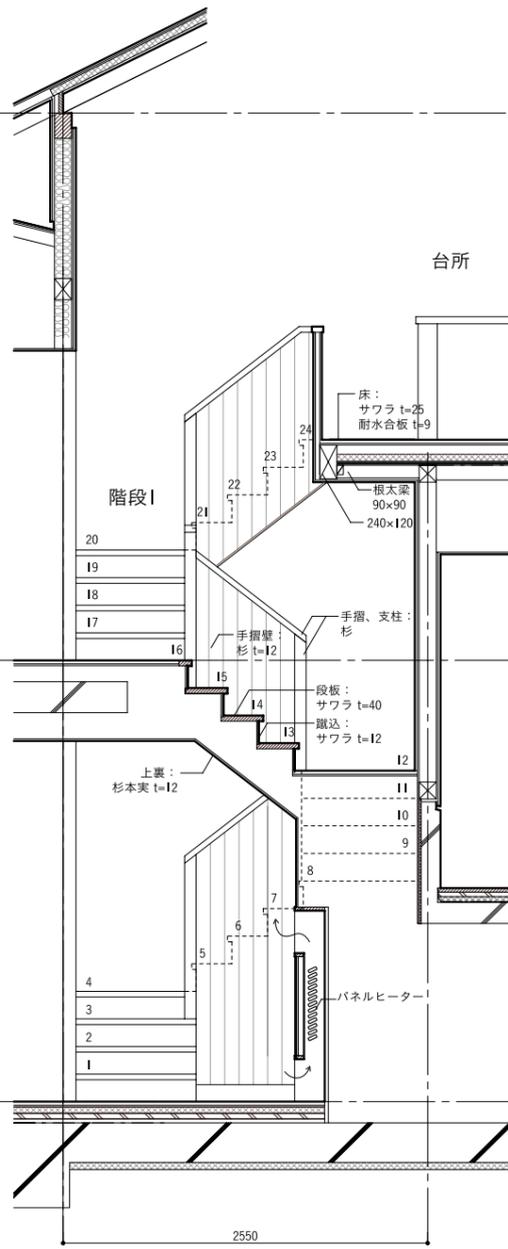
広間北面を見る。この家の中で最も高いレベルにある。天井高は、2,310~4,222mm。柱には藤を巻いている。床はサワラ、化粧野地板はアカマツのリップ加工板



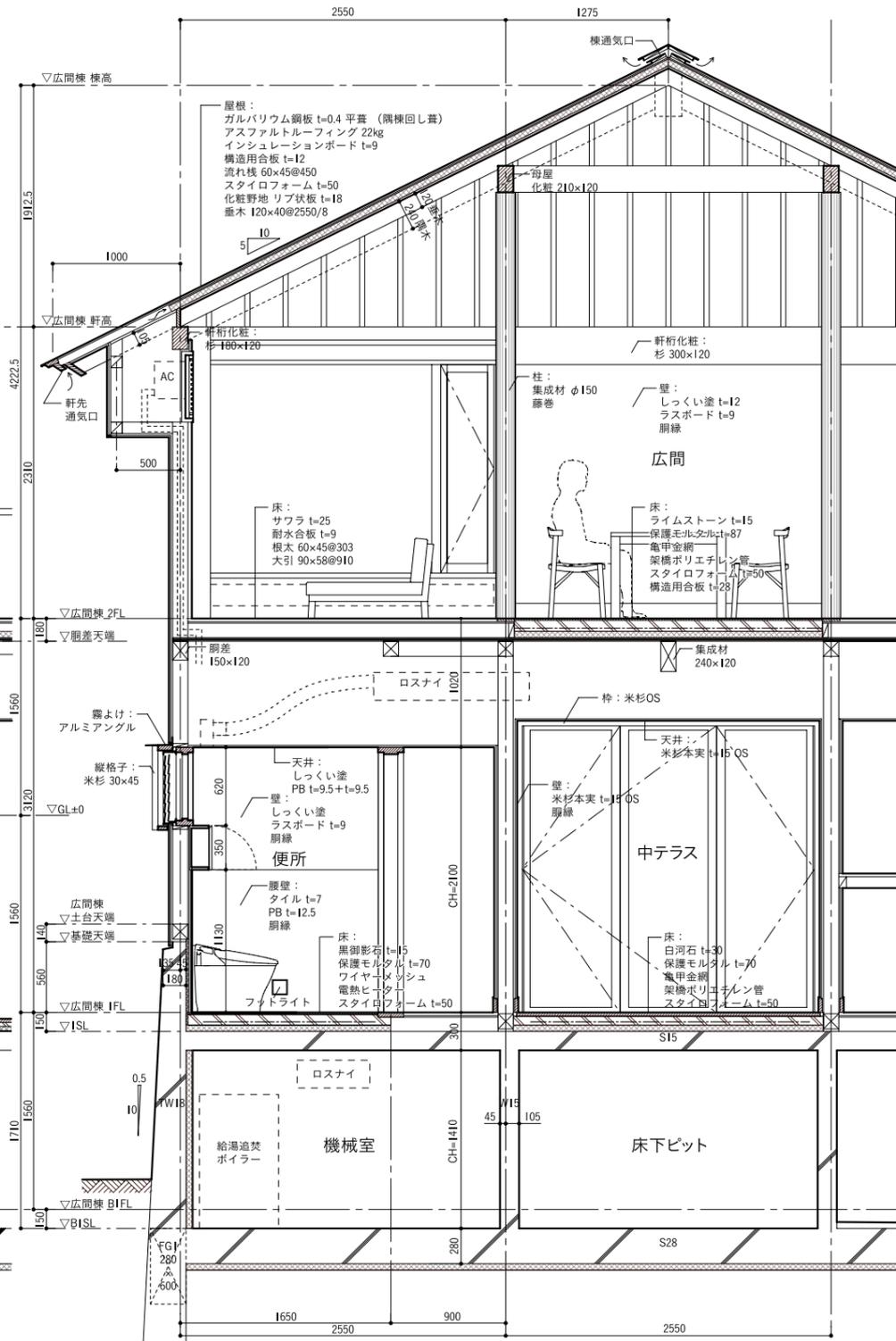
玄関ホールより玄関を見返す。玄関通路の右手には下駄箱が埋め込まれている



A 断面詳細 1 / 50



B 断面詳細

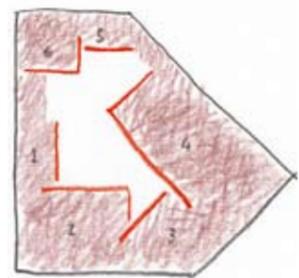


C 断面詳細



左頁：南東の畑から見る外観。横張りの杉板は厚さ30mmで着色塗装
下：中2階から居間を見下ろす。棟木は300mm角のヒノキ。大面を取り、
武骨にならないようなかたちにした。垂木はヒノキ150×75mm





上：家の輪郭（外の表皮）と腰壁（内の表皮）に沿ってスペース1から6までの小さな居場所が、レベルを変えながら展開していく。

右頁：温水式床暖房の施された土間の周りでくつろぐ。どこかの街角にいるような立体的な空間

日々の暮らしの舞台

私たちは日々同じテーブルを囲み、食事を取り、会話をし、同じ空間を眺めている。人は生まれてから絶えずそれを繰り返し、こうしたささやかな時間の積み重ねが、人の意識や気持ちのあり様に大きく影響を与える。

この家を「Piccolo Teatro」と名付けた。イタリア語で「小さな劇場」を意味している。日常のほんの些細な出来事や小さな発見を、舞台上に立つ役者のように大げさな身振りで楽しもうとするイタリアの人たちのイメージと重なった。

ダイニングの床に腰掛けて土間で遊ぶ子どもとくつろいだり、上のフロアからキッチンで食事の支度をする様子を見下ろしたりと、家の中にはさまざまな視線が生まれている。

この空間は「生きる」という最もリアリティーのある物語を演出するための「舞台」である。ここで演じられる日々の生活は、10年、20年と蓄積される中で、知らぬ間に、気持ちのあり様や家族の関係に前向きな刺激を与えてくれる。

上：スペース5から下階を見下ろす。観客席から舞台を見下ろすかのような立体的な視点があちこちに展開する。
下：玄関ドアを開けると、墨入りモルタルの漆黒の土間空間が広がる

